

市民科学通信

09 2025 No.64

『ともいき塾読書会』の案内	02
第27回市民科学研究会（最終）の案内	03
【本の紹介】富永京子『なぜ社会は変わるのか』	
講談社現代新書、2025年	三宅正伸 04
心に留まったお二人	ひとりごと 07
【「ひとりごと」さん】	
「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」	
を創りました	重本冬水 08
60年ぶり稲の手刈りをして	中川在代 09
「日本人ファースト」とは何？	塩小路橋宅三 10
近況短信：ファンタジーにある老い	宮崎 昭 13
—団地タクシー奮闘記「持続可能性は？」の巻（34）—	
テレビドラマ「大阪激流伝」の町工場と「反博」	真島正臣 15
—兵器部品の下請けでも平和願望の人々—	
ノルトライン・ヴェストファーレン州の地方選	照井日出喜 18
—西部ドイツにおける極右勢力AfDの伸張—	
資本制社会の日常意識（2）	小林一穂 24
激しい雨が降る —Kさんへ—	中村共一 30

2025年9月28日発行

発行：NGO 市民科学京都研究所

事務局 E-mail: sigemo.nao@gmail.com

『ともいき塾読書会』の案内

日時；2025年10月5日（日）13時30分～16時

場所；冬水文庫（堀川丸太町一筋北の通りを西に入った北側）

主催；NGO 京都社会文化センター・ともいき塾

協力；月刊「市民科学通信」京都読者会

内容；

1）＜本の紹介＞富永京子『なぜ社会は変わるのか』講談社現代新書、2025年
三宅正伸（ともいき塾）

2）＜テーマ＞「今、世界にはびこるアウトロー」（仮題）
中川在代（ともいき塾）

3）照井日出喜訳「ドイツ連邦議会選挙(2)(3)；われわれの社会は、危険に曝されている
（グレゴール・ギジ・インタビュー）＜上・下＞」（月刊「市民科学通信」59号・
62号）および照井日出喜訳「＜資料＞ファビアン・ランベック『疑問符の付く軍備
拡張』一巨額の武器調達のための財政支出計画は、ヨーロッパ連合（EU）に新たな対立を惹
き起こす」（同上62号）を読む

重本直利（非武装永世中立の日本をめざす市民の会）

※「市民科学通信」はネット上で公開しています。

＜冬水文庫、本のギャラリー＞



第 27 回市民科学研究会（最終）の案内

日時；2025 年 11 月 3 日（月・祝）13:00～16:00

場所；龍谷大学大宮キャンパス西翼 2 階大会議室（キャンパス西端の建物）

（西本願寺の南隣り、京都駅から徒歩 15 分、下京区七条通り大宮東入大工町 125-1）

《プログラム》

テーマ；市民の平和力を求めて

報告 1）「市民の平和力を求めて」

中村 共一

※参考文献；中村共一「市民の平和力とは何か―実践としての『永遠平和』―」（『市民の科学』13 号特集Ⅰ（2025 年 11 月）および月刊「市民科学通信」63 号（2025 年 8 月号）。

報告 2）「ドイツ左翼の現在―極右 AfD の台頭に抗して―」

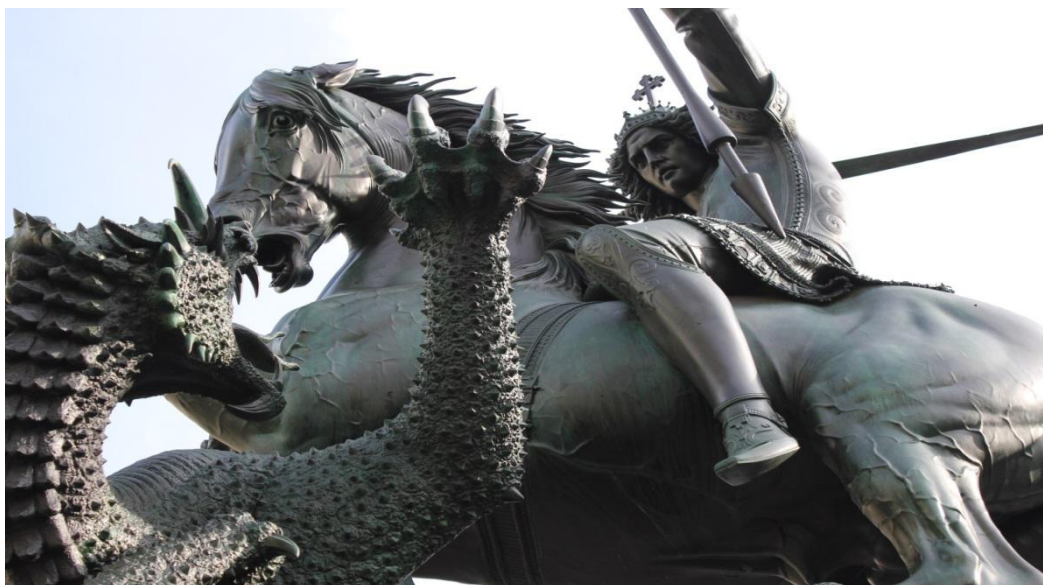
照井 日出喜

※参考文献；特集Ⅲ「注釈：ドイツ左翼の現在―極右 AfD の台頭に抗して―」（『市民の科学』13 号特集Ⅲ（2025 年 11 月）および照井日出喜「ドイツ連邦議会選挙(1)～(3)」（月刊「市民科学通信」57 号 3 月、59 号 5 月、62 号 8 月）

< 報告各 50 分、質疑応答各 30 分 >

※「市民科学通信」はネット上で公開しています。

聖ゲオルギウスが「悪魔の化身」である龍に立ち向かう像（ベルリン・シュプレー河畔）



撮影；照井 日出喜

注）戦争は「悪魔の化身」です(重本)

【本の紹介】

富永京子『なぜ社会は変わるのか』

講談社現代新書、2025 年

三宅正伸

本書の著者は以前、京都社会文化センター町家において開催された社会文化学会西部部会研究会に参加され、このようなセンターが社会運動としての広がりを見せることを期待しているとコメントされたことを覚えている。私は当時、学会の事務局長であったので社会文化に対する理論ばかりでなく社会運動としての実践が大事と発言したことを覚えている。公式なオールドメディアを賑わせる抗議デモや、SNS 利用の非公式なネットメディアによる電子空間でのコミュニティが、いずれもマス化した伝達手段となっていることを見逃すことはできない。それによって雰囲気にて事実と真実を混同したり、偏狭な共感空間にて部族化して他との敵対関係に陥ったりすることが現代的課題と思える。社会は勝手に変わっていくものではなく、私たち一人ひとりがそこでのスタッフでありキャストでもある。もしかして歴史の変換点に知らないうちに遭遇しているのかも知れない事実を認識し、責任ある言動をとるために過去の研究や事例を示したのが本書である。

著者はあとがきにて社会運動論についての新書が刊行されていないことに関して、「誰も入門書を書かず、学術的な本だけが流通すれば、一般の人に社会運動論が知られることはない。結果として、日本における社会運動の見方は、参加か不参加か、共感か反感か、賛同か否定か、といったきわめて貧しいものになる。」と、警鐘を発している。本文においても「社会運動論が生み出した知識が大学や研究機関という閉鎖的な場所だけに利用されることは、「研究者のためだけの研究」につながりかねませんし、そうなれば社会運動論は「理論のための理論」になってしまいます。」と、研究者としてのチャレンジを促している。しかしながら、社会運動には興味を示しながら社会運動論には門外漢であった筆者にとっては、著者は入門書と述べているが難解であった。誤読があるかもしれないが、理解できる範囲で振り返ってみたい。

アメリカでの理論として集合行動論/資源動員論、政治過程論/動員構造論、政治機会構造論、そしてフレーム分析が紹介されている。ヨーロッパでの研究では「新しい社会運動論」が触れられている。この本の目的の「社会を変える」とは何だろうかを、過去の研究や事例に照らして明らかにすることとしている。社会運動でなくて社会運動論とは何かは難解である。署名活動などにより支持を広げ、政治家へのアプローチによって要求実現するやり方がオーソドックスであるが、果たして「共感・反感」「好き・嫌い」「賛成・反対」の二分法に縛られるものであろうかが指摘できる。ロビー活動などの「利益集団」的側面と「社会運動」的側面が混じっていると考えるのが正確である。さらに組織行動だけが社会運動だろうか。緩やかなネットワークでの連帯も存在する。誰が社会運動に参加をし、それはどのようにして起きるのが社会運動の実践の社会運動論なのである。高学歴なのに低賃金という不一致の現実を変えようとする集団行動発生などは考えられることである。その集団行動が社

会運動化することも想定できるが、普通の人以上に怒りっぽい人が原動力になるが、昨今では普通の人でも不平・不満を前面に出すようになっている。社会運動によって勝ち取った制度は運動に参加していないことにも恩恵がある。そうすると、誰かが立ち上がってくれてのフリーライダーを決め込む人が出てきて当然となる。集団行動を行うには組織が必要である。わざわざ自ら立ち上げるものがない運動に誘い込む組織づくりである。そしてその組織はある程度の継続性が必要で、これが「資源動員論」である。動員を容易くさせるのは動員費という「お金」が手っ取り早い。それには資金が組織へ集まらなくてはならない。外部からの支援提供者は自らの利害が不利にならない範囲でスポンサーになってくれる。そうすると社会運動自体が変節していくことも想定内となる。それを起こさないためには、大きな寄付をしてくれるスポンサーに頼ることなく、分散することが必要となる。資源動員のために外部支援者の顔色をうかがうことによって、要求実現のための集団行動の継続性が図れるかの問題が生じる。純粋な要求貫徹のためには外部支援者は必要不可欠だろうか。支援には物質的資源と非物質的資源がある。権威者がそのネームバリューで支援してくれることなどは非物質的資源である。そのような過程を通じて、政治的要素を軽視してはいけないと「政治過程論」に変化していくこともある。

「政治過程論」とは、政治的・経済的な決定権や影響力を持たない人が、自らの権利や利益を獲得するために政治に影響を及ぼす試みとして社会運動することである。「資源動員論」では外部からの支援を重視していたが、ここでは自らの運動を重視することになる「動員構造論」である。支援者の利益を考えて行動する「資源動員論」と相違するところである。つまり、弱い立場の者が「構造的な権力」を有して、政治的エリートにも立ち向かっていくマルクス主義労働組合の運動である。創価学会は宗教運動が社会運動と一体となる例で、高度経済成長期に都市部に流入した地縁・血縁の乏しい層から支持を得て組織化した。社会運動家は一から組織を作るわけでもなく、所属している組織を通じて活動することが一般的で、これを動員構造と称する。アメリカの黒人公民権運動などは先に存在していた組織の教会や大学が動員構造となった。

「政治機会構造論」は「する側」でなくて「される側」の理論である。森喜朗東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員長は女性蔑視の発言で辞任した。その発言を受けてハッシュタグを用いた「わきまえない女」の抗議の力が大きかったのである。このように「される側」からの社会運動が、その達成を可視化した実例である。「集合行動論」のように人々の心理的要素の認知的な面と、「資源動員論」のような外部環境に注目した構造的な面はお互いが影響しあっている。この二つの側面が合流した理論に「フレーム分析」がある。不平不満を加工して意味や意義を付与するのである。イギリスのチャリティ・バザーではお金を使わない運動がある。つまり物々交換で、気に入った物を得るために自らのダンス披露と交換する参加者も存在する。このチャリティ・バザーは「お金」を稼いでいようとかかわらずに楽しむことの社会運動である。ここで参加者が「お金」とは資源であることを共通の認識に過ぎないことを知り、「お金」よりも大事なものがあることを確認するのである。

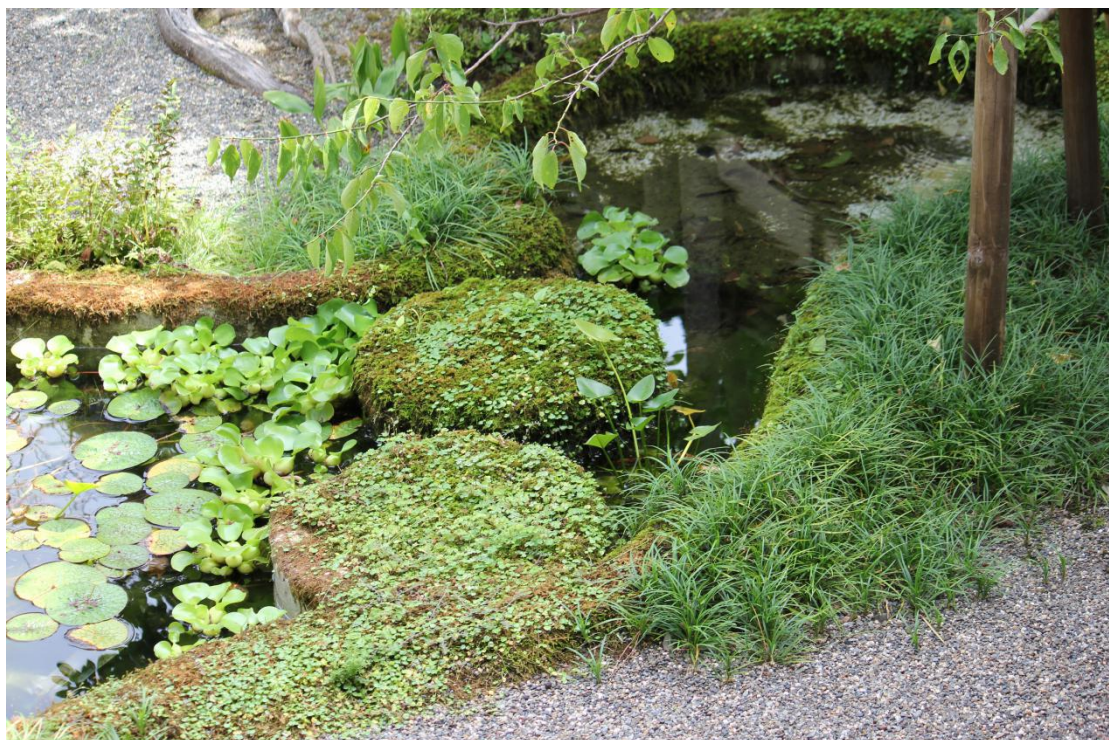
「フレーム分析」例として小売業におけるカスタマー・ハラスメント対策があげられる。労働組合が客の従業員に対する迷惑行為をアンケートすると、そのひどさに経営者も対策を考えた例である。カスハラとフレーミングで名付けをすることにより、問題を明確化・特定化してメッセージ化したのである。その後、このことはタクシー業界にも波及した運動となった。

最後に欧州での理論である「新しい社会運動論」についてであるが、ドイツやフランスでは一般的である。社会を扇動しているテクノクラートへの対抗ともいえる個人を中心にして考えた運動である。自分自身や文化、人々の意識を変える運動でもある。ハーバーマスは軍事や安全保障といった「古い」政治と、生活の質や人権といった「新しい」政治を切り離し、

成長はいいものだという価値観を否定する。コミュニケーションを通じた文化価値の変革なのである。たとえばタイ米はまずいという価値観をひっくり返して、米を炊く消費文化での電気炊飯器がタイ米をまずくしているというような発想である。国家や市場による人々のコミュニケーションや関係性の支配を否定するのである。環境問題に重点を置いた社会運動の特徴は、このような支配関係をいったん否定するのである。安倍氏の国葬などでは国葬そのものよりも何らかの不満が動員力になっていた。目的や成功に縛られない社会運動もある。そのことが新しい社会的価値を創造するのである。後で考えると、誰かが社会を変えたのではなく、私たちを含む多くの人が社会を変える運動にかかわっていたのである。

本書から得た筆者の感想を以下のように述べる。近代の幕開けとともに呪術的な世界は幕を下ろしたかに見えたが、陰謀論やカルトが社会運動に影響を及ぼしている。現代人にとって魅力的なところは「まさか。もしかして」と思わせる快感である。ファクトチェックのないネットでは「言った者勝ち」の世界となっている。参議院選挙において排外主義政党が支持を得たのは、右翼や左翼といった従来の枠組みでなく、受け入れられやすいことを並べたポピュリズムの権化であった。そしてその伝達方法はSNSを通じてのネット配信であった。若年層においては投票することによって、社会運動に参加しているような幻想を与えるやり方が当選しに結びついたのである。議会主義における民主主義とは恐ろしい結果を生むものであるが、投票行動に至らなかった有権者が半数も存在することを念頭に置いた社会運動が必要になってくるのではないかと思う。

詳しくは、毎月第一日曜日 13 時 30 分(10 月は 5 日)から冬水庵(堀川丸太町一筋北の通を西に入った北側)にて開催している『ともいき塾読書会』で報告するので、参加期待である。
(みやけ まさのぶ)



心に留まった お二人

ひとりごと

故 むのたけじさん。

2025 年 8 月 20 日、朝日新聞天声人語に書かれていた中に、心に留めておきたい言葉がありました。ジャーナリストのむのたけじさん、戦争報道で国民を欺いたと終戦の日に朝日を辞められ、その経験から「はじめに おわりがある。抵抗するなら最初に抵抗せよ」と。厳しく重い言葉です。が、正しい言葉です。

「通信」63 号に重本さんが投稿しておられた「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」があれば私も参加したいと興味深く受け止めました。

そしてもうひとかた、同じく「通信」63 号で宮崎さんが団地タクシー奮闘記で書いておられた元ウルグアイ大統領、ホセ・ムヒカさん。

2025 年 5 月 15 日、朝日新聞朝刊、元ウルグアイ大使の方が、ムヒカさんを訪ねた時の様子を書いておられました。

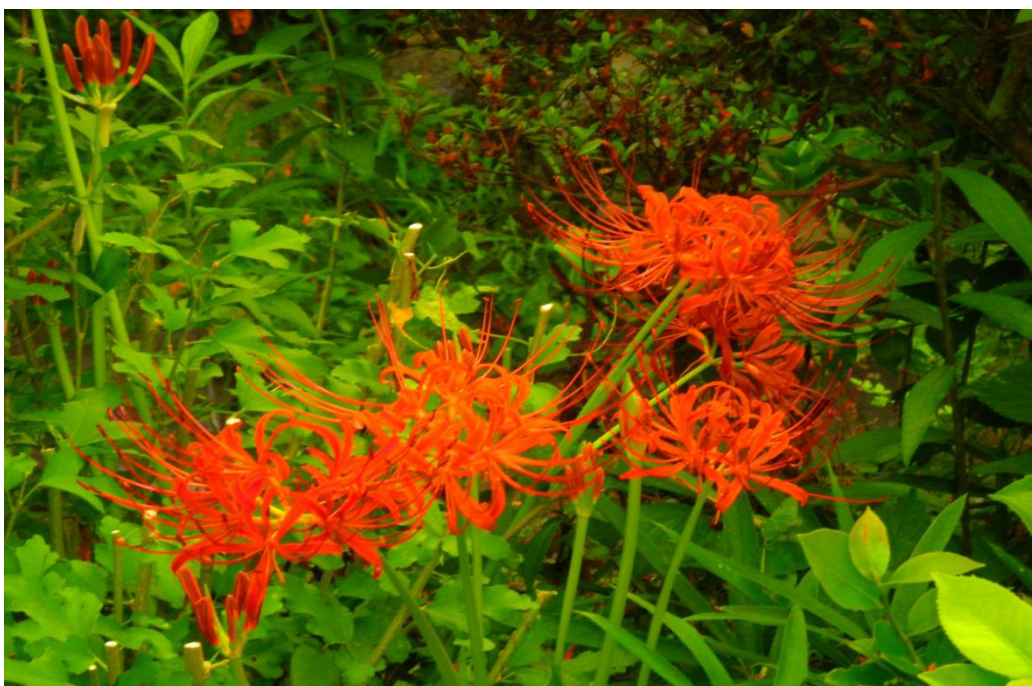
「世界で最も貧しい大統領はとても心豊かな方だった」と。

ムヒカさんは「何もかも持って満たされている人がさらに『これが欲しい』『あれが欲しい』というのが、貧しさだと思う」と。

ペットボトルのキャップを敷き詰めて作った庭のベンチで、私もコーヒーでも頂きたかった。

必要な事、物、見きわめながら、時々ほんの少しの欲張りも有かな、と思いながら穏やかな日常を望みたい。が、むずかしい。

(ひとりごと)



【「ひとりごと」さん】 「非武装永世中立の日本をめざす 市民の会」を創りました

重本冬水

9月に入った頃、「ひとりごと」さんから電話がありました。「通信」前月号で私が書いた稿にある「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」に入りたいのですがという連絡でした。私にとってたいへんうれしい連絡です。「ひとりごと」さんに、私もそうした会があれば入りたいのですがどこにもないようですと答えました。かなり以前に関東の方でそうした会を創る試みがあつたが頓挫したということを専門の方からお聞きしたしたことがありました。現在、「非武装永世中立をめざす」の取り組みは日本のどこにもないようです。だが、ほんとうかなと疑っています。憲法9条のあるこの日本で「ない」のはおかしい。

「ひとりごと」さんに、「それじゃ創ってみましょうか」と、もう少し若ければ言ってみたのですが、それは言えませんでした。それからしばらく考え、もし日本のどこにもないのなら、私1人で創ってみようかと思いました。そして2025年9月15日に重本冬水1人で「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」を創りました。

ただ、これは私1人の「会」です。「会」とは一般的には集まり、グループ、団体などですが、「さとり」、「理解する」の意味もあり、「会得」、道理を会得する「理会」という意味もあり、1人の「会」（理会）として創りました。じゃ1人で何をするのか。まず、拙宅の門（末尾の写真）には憲法会議の「憲法9条世界の宝」と「憲法を生かし戦争でなく平和の準備を」のポスターがありますが、そこに「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」を添えてみよう（ポスターを貼っているのはこの「会」ですと）、それから名刺に加えよう、龍谷大学のゲスト講師の際の所属名に加えよう、メール送信には「非武装永世中立の日本をめざす市民の会（重本）」を付けよう、『市民の科学』13号での執筆者紹介にも所属に「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」を付けよう、年賀状にも記載してみよう等々、次々と浮かんできます。多くの人がこれを行えば「力」になるのではないか。これは私の勝手な「夢」です。

「ひとりごと」さん、是非「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」という1人の「会」を創ってください。「非武装永世中立の日本をめざす市民の会」に所在地はありません、組織ありません、会則ありません。明確なスローガン（主張の標語）だけです。柄谷さんの言葉を使えば「霊」のようなものです。また、それはこれまで戦争で亡くなった多くの人々の「霊」です。今、この瞬間にも多くの命が奪われています。

「9条を守る」だけでなく「非武装永世中立の日本をめざす」ということです。また、憲法前文と9条そのものは「非武装永世中立」です。これ以外の解釈（会得）の余地はありません。「理会」です。

「非武装永世中立をめざす」のは私たちの最高規範（憲法前文と9条）であり倫理的義務の「霊」（社会的・歴史的・文化的性格をもった「力」）と思えてなりません。何があっても如何なる場合も戦争だけは起こさせない。この決意は如何ともし難いのです。それは「非武装永世中立の日本をめざす」という決意（理会）です。

（しげもと とうすい）



60年ぶり稲の手刈りをして

中川在代

放棄地の背の丈越える草の波 福島県 佐藤国喜
新米はニュースで拌み備蓄米 8/14 付 朝日柳壇

今年、弟夫婦が米作りしている水田ほぼすべての稲が倒れた。大した雨や風があった訳でもないのに「べたごけ」である。雨が續くと、発芽したり腐ったりするし、地面が乾きにくい。秋雨前線の活発な時期ゆえ「雨が降り続きませんように」祈るような毎日であった。

「コシヒカリ」は寒冷対策として開発された品種で、暑さに弱く、茎も倒れやすいという。台風時期迄に収穫できる利点もある。日本の稲の殆どが「コシヒカリ」の系統で、銘柄米として価格も維持されている。

倒れた稲の手刈り取りには手間がかかる。負荷が大きいのであろう刈取機が度々故障、その都度農機具店の修理を頼るハメに。例年と違い、畔近くや四隅は刈り残しが多く、鎌で刈り取ってほしいと弟に頼まれた。60年ぶりの手刈りは、残暑、広さ、そっくりな雑草との見分け、所々の泥濘、入口への稲の運搬とへとへと、5時間で5枚が精一杯。

子供の頃、農繁期は毎日のように手伝いをしたが、その頃の記憶とは、株が大きく、穂が重く茎が柔らかい感じがした。栽培技術の向上による収量増、昼夜の高温続きが影響しているのだろうか。他の農家でも「べたごけ」を見かける。

TICAD 関連情報で得たアフリカの現在地は、人口 15 億人、若年人口が多く、2050 年には世界人口の 1/4 を占めると。巨大市場・若年労働力から最後のフロンティアと注目される。植民地を経て独立した国は歴史が浅く、政治的に不安定、豊富な鉱物資源確保の為の投資や紛争が続く。1 国に多数の民族が暮らす環境は潜在力の源とも。

しかし、人口を支える雇用・社会基盤（教育・人材・農業・保健衛生）が未整備で、収入や安全を求めて都市や海外への脱出を試み命を落とす例も後を絶たない。食料は輸入頼り、気候変動の影響を受けやすい。高関税による輸出産業の不振、海外援助の打切り・減額に伴う苦境、先住民の言葉・伝統・文化の危機も深刻である。

資源に乏しく、人口減、高齢化、巨額財政赤字、政治の劣化、インフラ老朽化、災害列島の日本と共通しているのは、食料、気候関連だろうか。アフリカの農業従事者は多いが、小規模家族経営が大部分、天水頼み、鎌や鍬による作業、草取りに追われ、鳥虫害も問題と。日本の灌漑、生産加工技術への期待があると。

農業政策に翻弄されながら村の米作りも大きく変わった。圃場整備されて田が広くなり、農道、水路が整備され、機械化が加速。一方で生産組合や個人への委託が増え続けた。体力・健康不安、ノリ面の大きな畔の草刈り、水路の維持管理、猛暑、雨不足、台風、激増する鹿害、カメムシ、ジャンボタニシ、農機の故障、何かきっかけがあれば米作りはたちまち立ち行かなくなる。

手刈りする田はまだいっぱい残っている。畑仕事と折合いをつけながらやり遂げたい。そして、機会があればアフリカの暑さを実感し、畑、作物、道具、作業風景を見てみたいと願っている。

(なかがわ すみよ)

「日本人ファースト」とは何？

塩小路橋宅三

先の参議院選挙において参政党なる政党が14議席を獲得した。そこでのキャッチコピーが「日本ファースト」ならずの「日本人ファースト」であった。これを民意として認められるのであろうかを吟味しなければならない。民主主義とは大事なものであるが、それによって生じる独裁主義は怖いものである。表現の自由とは大切なものであるが、それによって生じるヘイトスピーチは恐ろしいものである。「日本人ファースト」なる表現が思慮なしに飛び交ってよいものだろうか。「言った者勝ち」のSNSなどがファクトチェックなしにスマホやパソコン上に流布してもよいのだろうか。今回の選挙は「黙れ」よりも煽れる「吠えろ」に扇動された結果であったと考える。

小学校の時にクラスに在日朝鮮人の女子がいた。いじめると親が学校に抗議に来るということで、引いてるクラスメイトが多かった。私はその子と言い争いになると、「本国に帰れ」などと言ったものだった。女の子は泣いてしまってその場は終わりであったが、担任の教師に職員室を呼ばれてお灸をすえられた。自分は日本人で彼女は朝鮮人、文句があるなら「朝鮮に帰れ」がなぜ悪くて、教師に叱られるのかが理解できなかった。そのようなことを考えているクラスメイトが数人いたが、教師に口答えするのは私だけであった。そのときの女性の教師は朝鮮が日本より早く独立国になったことを捉えて、差別的な発言は慎むべきとの論理であった。そのような説明では国籍の違いは区別であって、何が差別になっているのかが分からなかった。日本が朝鮮を植民地として、労働力不足解消のために日本本土にいわば連行したことなどは高校生になるまで関心もなかった。高校において朝鮮半島の歴史などに興味を持つようになって、自分が差別的見方をしていることに気が付いたのである。小学校の教師は「日本だから日本人ファースト」などの考えは、差別につながることを子どもに教えるべきであったと思える。現在、このような主張がSNSで公然と広められ、それによって当選した議員が存在することは民主主義の恐ろしさである。子どものときの教育を間違えると、このような結果になることは道理である。少なくとも「日本人ファースト」で嫌な思いをする外国籍の人が生活しているのだからおかしいのである。さらに、当選第一主義によるポピュリズムによって民主主義は死ぬのである。

その頃の教師も含めた親世代は日本に住んでいる外国籍の人は、本国での生活が苦しくて日本に稼ぎに来ているというような認識であって、本人の意思で来日して住み続けている「日本の居候」という認識であった。外国籍、特に在日朝鮮人はおとなしくしているべきとの感覚であったと思う。「皇民思想」でありながら、在日朝鮮人と結婚したような日本人を蔑んでいたような矛盾が存在し、現在でもその傾向は否定できない。戦後の時代背景では「第三国人」などの差別的発言すらする人もいた。在日朝鮮人に暴力団などの反社会組織構成員が多いことは就職差別が絡んでいることなどを教えてくれる親世代は皆無であった。子どもの頃のプロレスの力道山はヒーローであったが、親世代の人から日本人ではないと言われてショックであった。国籍を証明する日本の戸籍制度に疑問を持ったのは、もっと後のことであった。ファクトチェックなしで「外国籍の人は税金も払わずに医療などの福祉の恩恵を受けている」と考えている日本人は現在でも少なくない。これは排外主義そのもので人権問題でもある。そのような「日本人ファースト」で国会議員になった政治家も存在する。

和暦という年号にはこだわりはないが、昭和 100 年とは近代から現代への過度期であった。世界ではいまだに近代史の中の国もあるが、日本では戦後 80 年が現代史なのである。近代史の日本は都合よく海に隔てられているため、大和民族は神の国での優秀な民族であるから他民族を啓蒙しなければならないなどという思い上がりのレイシズムが生きていた。今でも「日本人であることが誇りであって、愛国心が必要」という人がある。地続きではないもののボーダレスになった現代史では「愛国心」が独り歩きしている。近隣に仮想敵国を意識的に作り出し、有事の際の国防を扇動するような国民国家の考えが定着してきている。そのような状況のもとにおいて、日本は実質的に移民を認める国になっているため、欧米で生じている移民問題の洗礼をこれから受けることになる。欧米では排外主義的な政党に支持が集まっていて、ハンガリーのオルバーン政権が主導しているような排外主義の傾向が日本でも見えてきている。生活習慣の違いから中東やイスラム諸国からの在日外国人が排外される対象となってきた。日本で生じている埼玉クルド人問題などは詳細が理解できないままで、自分の住んでいるところで起こらないことを願っている日本人も多い。そのような背景において、「日本人ファースト」が支持を集めて投票行動までに至っているのである。

当選第一の議会主義にも疑問が残る。当選者が思惑より多く出た政党は、「これが民意」とばかりに右派左派ともにエクストリーミズムに走ることがある。比例代表制の選挙においては既成政党支持者が投票に行かないように仕向けるだけで当選できるからである。そこで「手取りを増やす」とか、「日本人ファースト」や「有機農業」を掲げる有権者にとって耳触りの良い少数政党がキャスティング・ボートを握ることとなる。このような現象が生じるのは、日本人の政治活動が投票行動に集約されているからである。そのようなカオスによってファシズムが生じた歴史がある。そこで外国籍の者には日本で生活しながら投票する権利がない。二項対立的に悪者にされる排外主義が悪夢を呼び起こす。それでは外国籍の者が自らの声を政治に反映させるためにどのような活動をすればよいのであろうか。

外国籍で参政権がなくても一定の条件を満たしているならばマイナンバーカードは交付される。この国民総背番号制のマイナンバーカードが住民票のある外国籍の者にも交付される意味を考えてみなければならない。しかもこのカードは不完全な「カシ(瑕疵)ナンバーカード」である。「不法残留者」と言われる外国籍の労働者のあぶり出しと、税としての大衆収奪のためにあるのかもしれない。納税義務があっても生活する自治体への参政権すらない外国籍の者は「文句があるなら本国へ帰れ」でよいのであろうか。生活習慣が違うのは当たり前のことなのである。「外国人も日本にいるなら日本の法律を守れ」までは許容できる範囲である。「自国ではマリファナは合法だった」の言い訳は日本国内では許されることではない。だからと言ってイスラム教徒に禁忌の「豚肉を食え」は許されない。日本に根付いた中華料理にすら「ガチ中華」と日本人向け「まち中華」がある。日本人も中国人もどちらを食べてもよいのである。都市部で目につくインネパ料理で、ネパール人は自ら商品化している日本人向けカレーは口にしないとされている。その理由は値段の割にまずいからである。客に自らまずいと思うカレーを食べさせてもよいのかと考えると、それが資本主義における商品であることに答えを見つけることができる。「日本にいるなら日本人に許容されるような言動をせよ」とまことしやかに言う日本人がいるが、果たして「日本人のようにしろ」の同化政策が多文化共生なのであろうか。

「日本人ファースト」とはあまりにも身勝手なフレーズではないかと思える。コンビニや飲食店の従業員で日本人と見分けがつかないが、ネームプレートを見ると外国人と思える人を数多く見受けられる。そこで「日本人ファースト」などと考えると、まるで日本人を「ご主人様」のように思えと感ぜられる構造である。もしも日本人が外国でそのような扱いをされていたらどう思うだろうか。白人の国で有色人種である日本人がそのような扱いをされていたならば、その「白人ファースト」に対して論理的に対抗することができるだろうか。む

しろ「名誉白人」を標ぼうするかもしれない。それではと経済力を背景に「人種差別」などと抗議するかもしれないが、白人と同じような待遇を求めた上で、白人と同じように黒人を見下すかもしれない。東南アジアの国で同様なことがあれば、腹を立てて「ご主人様」を堅持する態度を示すかもしれない。「お金の前に平等」が資本主義の本質であるが、そうではないのである。現実一般的な日本人よりも中国や韓国からの観光客のほうが金持ちなのである。それは認めつつ日本人の「ご主人様」の態度は変わることがない。観光地の京都においては、自らと同じ有色人種は白人と比べて迷惑な存在と考えている者も少なくない。なぜ中国人観光客は大声を出すのであろうか。そのような感覚を捉えて「日本人ファースト」が投票行動に至っている。少なくとも自分の属していない集団は意図的に「敵」となり得るのである。洪水のごとく溢れる情報すら、事実の客観性が感覚の主観性に転化している。本当は他者からの情報を何らかの方法で信ずるべきかを決定しなければならないが、安易なフェイクニュースに惑わされてしまっている。学校の教科書に記載されていることも、新聞・テレビの情報も鵜呑みすることはできない。ましてや、ネット情報などは一先ずフェイクと疑うことが賢明である。それが面倒でできないのが現代人で、意識的にフェイクな情報が拡散していく。そこを見極められる能力がカント的に表現すれば、「啓蒙」の力なのである。政治情勢の不安定を考えると、「有事」を想定してのマイナンバーカードによる国家管理の強化と、自粛が他粛になる「外国人に気をつけろ」キャンペーンなどもあり得る状況である。表現の自由はあっても、「日本人ファースト」は差別用語で危険なのである。そのような政党が私たちの治めた税金によって活動を支えていることに大きな疑問を感じるのである。

(しおこうじばし たくぞう)



近況短信：ファンタジーにある「古い」

—団地タクシー奮闘記「持続可能性は？」の巻—（34）

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのは、この7月77歳になったキャリア8年になるうとする老人です。

タクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー（老老）相互扶助の泣き笑い報告です。

ここで「タクシー」と銘打っていますが、電動アシストのついた、重さ100キロ近くある三輪自転車です。ヒトとモノを乗せると自身の体重もあり、かなりの重量になって、ペダルが相当重くなります。坂道があるから余計大変です。「開業」して12年以上になりました。

9月になりました。秋空が広がり、月明かりに虫のささやきが重なって、ペダルを踏む（ベテランは「回す」といいます）姿勢が整うはずですが、どうも挫かれてきた“残暑”の厳しさでした。

§

私事ですが、この夏の「猛暑日」を乗り越えられるか、かなり決死の覚悟で臨みました。多くの人が経験していることですが、太陽の熱風は上からだけでなく、反射して地面から吹き出てくるのですね。これに来年も耐え忍ぶことができるのか、何度も何度も思い巡らすのです。これからどうしようかということです。

全国から注目を集めている当団地タクシーなのですが、抱えている難題は深刻です。まず第一は、運転手の高齢化です。現在、団地内に居住している運転手は私を含めて3人です。さらに近隣から駆け付けてくれる2人も含めて、79歳から66歳までの中高年スタッフ5人です。団地内に住んでいるスタッフは、突然の緊急事態に対応してくれています。頼りにしているのですが、この先も順調に進むかどうか不安です。

第二は、14年前に購入したこともあってか、タクシー三輪車の故障が頻繁に起こることです。幸い、運転手で隣町から来てくれているHさん（77）がメンテナンスをしてくれています。もしHさんに不都合が生じた場合、お手上げになってしまいます。綱渡りの現状です。

思い切って、軽量で操作が簡単な車両に更新するかです。その場合、この新車両を製造する企業が、メンテナンスの業務を格安で引き受けてくれるかどうか心配です。最近の言い方ですと、「コスパ」の問題です。現在、乗車してくれる住民には、乗車1回につき100円以上の寄付をお願いしていて、年間25万円ほどの収入です。これで修繕費を賄えるかどうかです。

§

第三は、というか、私にとって一番悩ましいのは、管理運営を行っている私の後継問題です。「連綿として拘っているのはお前だ」「後継者はいくらでもいる」という声もあるでし

ようが、得心していない自分があります。私が個人事業としてやっているのなら、後継者の「発掘」は私の責任です。タクシー事業を辞めるのも自由です。しかし、そうではありません。自治会として組織的に運営しているのですから、後継者選びは自治会の責任であり、自治会の創意工夫によって解決されなければなりません。世間では、町内会やPTAの持続可能性が疑われていますが、その難局をもたらしている第一は、役職後継者（跡継ぎ）の不在です。個人商店や飲食業の倒産、廃業が時を追うごとに起こってくるのも、こうした「高齢化」と無縁ではありません。

しかし、こうした事態を「時の流れ」「潮時」と受け止めることには、やはり抵抗があります。定年が決まっている職場や事業体なら別ですが、70代、80代になって出処進退を決めるのは自分です。それを決めるのは何らかの「規則」ではなく、どこからともなく聞こえる「ささやき」の声です。石破さんもこの「ささやき」を聞いたのでしょうか。

§

営利事業ではなく、社会福祉に繋がるボランティアで、あるいは被曝団体での反核・平和運動の活動家にあって、自身の高齢化に直面して逡巡するのは、決して当事者個人の問題ではありません。高齢化社会が問題になるのは、社会保障費の負担や分担にあるだけでなく、社会が社会として機能し持続可能になるための条件が失われつつあるということです。

そのために何ができるのか、ただ若者に期待するだけでなく、何かアイデアを捻出する責任が、私たち高齢者にもあるのではないのでしょうか。「市民の平和力」とか「市民のアソシエーション」というものの内実は、ここにあるのでは、つくづく思うのです。

「明鏡止水」という言葉がありますが、最近になって思いを巡らしています。

＊「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

(みやざき あきら)



テレビドラマ「大阪激流伝」の町工場 と「反博」

—兵器部品の下請けでも平和願望の人々—

眞島正臣

一、はじめに

8月31日にNHKで放送された、大阪の町工場を中心に描かれたテレビドラマに衝撃を受けた。大阪砲兵工廠が日清、日露戦争の時代から武器を製造する工場のあった場所で1945年終戦の前日に米軍の飛行機で爆弾を落とされ、破壊されたということも知っていた。だが、六万人の労働者が働き、大阪中の町工場が戦前、網の目のようなネットワークがあったことは、知らなかった。太平洋戦争の実情を目隠しされていて、関連性を想像しないでいた甘さを思い知らされた。ドラマは、朝鮮特需の時代までの大阪を舞台にしているが、「戦争と関わりたくない。もうたくさんだ」という反省がどの登場人物にもある。話は飛ぶが、大阪城公園全体が旧砲兵工廠跡地である。ここで、次の年開催の70年万博に反対する若い集団が集まり、「反博」という抵抗イベントが開催された。当時、私も見に出かけた。「大阪激流伝」では、「反博」をクライマックスに取り入れて、再現していた。ベトナム戦争反対のデモに参加した祖父と孫娘が出会う。後半の「反博」で武器を作っていた祖父が若者に咎められる発端になる。あまりにもローカルなテーマかもしれないが危険な状況にある世界の戦争を再考させ、さらに警告させる、地域に基盤を置いたドラマであると思える。セリフがてきぱきとして小気味よい。拙文では、ドラマの面白さを効果的に伝達出来ていないので、申し訳ない。

二、「大阪激流伝」のストーリー

田口留蔵（堤真一）と妻（麻生裕未）夫婦の町工場田口鐵工所の三代に渡る戦後史である。留蔵は、元砲兵工廠の旋盤工で、焼け跡から立ち上がるために中古の旋盤を購入し、マシン製造の下請けなどで生計を立てようとしていた。戦後復興は、大阪の町工場から始まったと言われていた。「これからは生きていくための道具を作る」と留蔵は宣言し、かつて兵器の産業に従事していたことから、生き方を変えようとしていた。ところが1950年朝鮮戦争が勃発する。朝鮮特需の経済変異が起こり、フィリッピンから帰ってきた息子の雅征が軍需部門の仕事を引き受けたいと言い出す。フライパンなどの民需製品を作ろうとしていた父親と意見が対立する。「金儲けがしたい」という息子の願望から、やりたくなかった朝鮮特需の下請けに携わることになる。テレビドラマであるが、ドキュメンタリーの様相を解説に挟んだ構成になっていて、実在の中氏という町工場の記録と証言を挟み込み、当時の大阪の町工場では、同じような悩みがあったと理解させてくれた。やがてGHQの方針が変わり日本でも朝鮮戦争向けの兵器製造を奨励することになった。その頃である。在日朝鮮人の間で、朝鮮戦争の武器づくり賛成派と反対派の分断が起っていた。猪飼野から夫成民という朝鮮人が「武器つくるのんやめてくれへんか」と田口鐵工所へ恐喝まがいでやってきた。「なんでやねん」と追い払うが、雅征はフリピン時代の兵士としての体験と重なり、「あの朝鮮人は頭

から離れへん」と旋盤で雅征は手を怪我する。後日、朝鮮人夫成民に雅征は武器づくりから手を引くことを伝えに行く。和解にはならず、激しい悪口を言い合う。在日の青年は「俺らがおるから大阪の汚い仕事をなにからなにまで全部やったって」という。現在、世界で起こっている移民排斥の感情とは違う。差別と共生の戦前からの棲み分けが身近な大阪で、繰り返し葛藤が起きていたことに思い知らされる。戦後復興のストーリーは、高度成長期に移り、留蔵の孫が女子大学生で、70年万国博覧会の開催に反対の声をあげた学生のグループの中にいた。会場は、砲兵工廠の跡地で、キャンプテントなどを使かった手作りのパピリオンが広がるなかで、留蔵が大学生から武器づくりとかかわっていることを批判され、一方的に攻撃の言葉をぶつけられる。若者の日本社会批判の声は、経済復興を目標に、公害など生み出しながら走り続けた無我夢中の時代を攻撃しているのである。大阪の「反博」へ当時、全国から6万人の若者が集まったという。ドラマの中で、朝鮮特需に便乗して豊かな生活がしたいという息子と対立していた父親、すなわち社長は、「生活に必要なものを作ればいいのだ」といっていた。

「作るのは、ミシンで充分や、日本は平和国家になったんや」と口論していた。留蔵も反戦思想の心情を持っていたのである。ベトナム戦争反対のデモに参加するような男である。学生の前で堂々と「武器つくっていた」とぶちまける人物である。

三、朝鮮戦争による大阪町工場の兵器生産の下請け

「大阪激流伝」は、ドラマでありながらドキュメンタリーのように戦後町工場の文献記録を引用し、実証的だった。先に説明した中さんという大阪の企業における記述でも、いったん戦争が終わり、平和産業へ移行していた。数年後、経営記録に兵器づくりをしていたことが書かれていた。二人の息子さんが登場して、当時の社長は、あまりそのことに触れたくなかったのか、身内にも話していなかったという。戦時中、兵器づくりに携わっていたので、徴兵からも免れていたと証言していた。筆者の育った街が物づくりに近いところでないと言えない。工場地域では、なかったが鉄屋の集まっている谷町では、不景気になると、巷では「戦争起ってくれへんかな」という声が聞かれた。朝鮮特需の体験からというより、戦争の火災から免れた古いまちであったから、日清、日露の太平洋戦争以前の体験も含めての庶民の発言であったようだ。平和を肯定する戦後庶民の声に混ざり、異なる意見も聞いていたのである。

四、砲兵工廠跡地での「反博」開催をドラマ中で再現

「反博」というイベントが70年代万博に対抗して、大阪で8月に一週間ぐらいだったか開催された。人々の記憶にはなく、同時代の友人なども知らないのである。筆者は、二回ぐらいは、見学していた。わざわざ時間を取り、出かけたのは、当時の評論雑誌の人気執筆を講演者に呼び、討論させたシンポジウムが開催されたからである。炎天下で、テントのような会場であったから、じっくり議論が行われたという記憶はない。条件の悪い状況で若者はよくやったという印象であった。ドラマでは、留蔵に議論を吹っ掛けた孫娘の学友が工場へ、就職試験に落ちたのを留蔵が救済したという場面が描かれていて、なるほど、ありそうだという思いにさせられた。理論的平和論を唱えていた若者が旋盤の前でいちから、見習いを始めるのである。社会の矛盾を学ぼうという姿勢である。この頃、田口鐵工所は、兵器産業の下請けに携わっていない。孫娘の父親、雅征が兵器づくりへ加担するのを辞めたと在日韓国人に、報告にいったときに、「そんなことして食うていけへんかったら知らんぞ」と言われている。

五、記憶の中の小田実、いいだもも、高橋和巳の講演

砂漠のような影のない砲兵工廠跡地の原っぱで、講演をされた三人の著名人で印象深かったのは、高橋和巳が病状が悪いのに、参加され、立っているのも辛いという状況だった。それから数か月後に亡くなられたと記憶している。余談であるが立命館大学の教授に赴任されたとき、校庭を歩かれているすがたを見ていた。教養科目の「文学」という講義を担当されたとき聴講にいった。前年に単位は取得していた。河合文学賞を受賞され有名人であった。受賞された長編小説をすでに読んでいた。「反博」での講演も誠実な発言だった気がする。分かり易く論点明快なのは、いいだももであったと思う。自由民権運動だったかの偉人の評伝を面白おかしく講演された。小田実の印象は、覚えていない。その後、大きなホールでの講演を何度も聞いたが、その頃、読んでいた新書の激しい主張の方が印象強く、人柄から感じる個性について、今は何も記憶がない。小田実、いいだもも、高橋和が大阪の手作りイベントに来てくれたという驚きと感謝は、筆者の私には、生涯忘れられない出来事になった。70年万博を批判するという、真剣さ、現代では考えられないような資本主義側への抵抗思想をあっぱれと思ったのである。当然ながら、トップクラスの論客のシンポジウムは、ドラマでは、登場しない。ゲストの先生らの堂々たる社会批判は、骨太で、今では、考えられない。

六、まとめ

ドラマでは、「反博」の会場で、多くの学生から非難を浴びる留蔵。最後には、平和を願う市民であることが表明される。いわば大阪の町工場代表のような存在である。ドラマの中で、「金が欲しいねん」と父親と議論した復員兵の息子雅証が、兵器づくりを辞めてどのように生きたかドラマでは描かれない。おそらく、日本の軍需産業は、現在に至るまで企業イメージを損ねるものとして、むやみに参加される分野ではない。旧砲兵工廠跡地を題材にした映画や小説は、少なくない。小松左京は、鉄くずを拾い集めて生計を立てる人間を「アパッチ族」と呼び小説『日本アパッチ族』を書いた。また、開高健『日本三文オペラ』、映画で話題を呼んだ梁石日『夜を賭けて』などが笑いもあり、悲喜劇さながらの作品をものにしていく。

ちなみに現代日本の防衛産業の現在についてネット検索してみた。

「防衛産業」をキーワードに NHKweb で検索してみた。

「防衛産業に関わることで企業の信用やイメージが損なわれるのではないか。こうした「レピュテーションリスク」への懸念は根強いのではないか。防衛産業はすそ野が広い産業で、企業が撤退してサプライチェーン＝供給網が維持できなければ、その影響が多くの企業に及ぶおそれもある。さらに、政府・与党が海外への輸出を促進する動きを進めているのに対し、野党の間から「平和国家」としての歩みを覆すものだと反対する声もある。政府として、そうした声にどう向き合っていくのかも問われることとなる。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240201/k10014343021000.html>

(2023 年 12 月 12 日 「おはよう日本」で放送)

さまざまな事例の紹介のあとで、この情報源は、抑制的なまとめをしている。政府の予算拡大に伴う大企業参入の動向が推測されたが、急変というようなものではないようだ。

※9 月 23 日午後 1 時、NHKBS で上記ドラマが再放送された。ドキュメンタリー手法の挿入は、カットされた。全体をドラマでまとめた内容になった。拙文と異なるので、了承ください。

(まじま まさおみ)

ノルトライン・ヴェストファーレン州の地方選

—西部ドイツにおける極右勢力 AfD の伸張—

照井日出喜

ノルトライン・ヴェストファーレン州の地方選は、2025年9月14日に行なわれた。1800万という、ドイツ最大の人口を持つこの州には、100万都市はケルンのみとはいえ、旧西独の首都であったボン、エッセン、州都デュッセルドルフ、ドルトムント、デュイスブルクといった相対的に大きな都市が散在し、なによりもヨーロッパ有数の工業地帯と称されるルール工業地帯が広がっている。

地方選は、州の市町村の議会・首長を選出するものであり、州の自立性がきわめて高いなかで行なわれる州議会選挙は、もちろん含まれない。

ノルトライン・ヴェストファーレン州の地方選では、一定の得票率以下の場合には議席を獲得できないという阻止条項は適用されず、その限りにおいて、市議会等には少数政党も代表を送ることができる制度となっている。

ちなみに、ノルトライン・ヴェストファーレン州の州議会選挙（2027年に予定）に対する、今年の夏（2025年8月22日）の世論調査における諸政党の支持率は、以下のようになっていた。（ ）は、2023年5月30日との比較を示す。

CDU（キリスト教民主同盟）35.0%（－1.0） SPD（ドイツ社会民主党）18.0%（－4.0） AfD（ドイツのための選択肢、極右）16.0%（＋7.0） 緑の党 13.0%（－4.0） 左翼党 8.0%（＋5.0） FDP（自由民主党）4.0%（－3.0） BSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）3.0% その他 3.0%（－3.0）

中道左派を自称する SPD と緑の党が敗北し、極右の AfD と左翼の左翼党が増える、という図式が鮮明である（BSW は、結党が 2024 年の 1 月であるから、前回の調査の時点ではまだ存在していない）。

この調査結果は、時期的に近いことから、当然のこととして、9月の地方選結果にほぼ連動している。

2025年9月13日のノルトライン・ヴェストファーレン州の地方選結果

（ ）内は前回 2020 年の結果。

CDU 33.3% (34.3) SPD 22.1% (24.3) AfD 14.5% (5.1) 緑の党 13.5% (20.0)
左翼党 5.6% (3.8) FDP 3.7% (5.6) BSW 1.1% (－)

5年前の選挙結果との比較を州全体として見ると、極右の AfD はほぼ3倍となっているのに対して、いわゆる既成諸政党が漸減するなかで、凋落のとくに著しいのは緑の党であり、さらに SPD も、今回は、地方選における歴史的に最も低い得票率であった（それでも、いわゆる中道左派と称される SPD と緑の党、それに左翼党と BSW とを合わせると、42.3%には到達している）。

nd 紙の論評によると、ライン地域の大都市ケルンの中心部地域（Innenstadt）では、第一

党の緑の党（33.1%）と第二党の左翼党（15.4%）とで48.5%となっているのに対して、ルール地域の都市であるエッセン、ゲルゼンキルヒェン、ハーゲンでは極右のAfDが躍進しており、個々の地域では32%にまで及ぶ得票率となっている（この数字だけを見ると、かなり東部ドイツの中小都市の状況に近くなっていると言えないこともない）。加えて、ハーゲン、ゲルゼンキルヒェン、デュイスブルクでは、市長選において、AfDは（第二党の地位を獲得していることから）決選投票にまで進むことになっており、結果はともあれ、この極右政党がかなりの勢力までのし上がってきていることを示している。

nd紙の論評では、そのタイトルが「左派のライン地方と右派のルール地方か？」となっている如く、ノルトライン・ヴェストファーレン州のライン地方とルール地方とでは、一般的に票の出方にかなりの相違が見られることが指摘されている（[Nordrhein-Westfalen – Kommunalwahl NRW: Linker Rhein – rechte Ruhr? | nd-aktuell.de](#)）。

9月14日付の「フランクフルター・ルントschau」の論説（[NRW-Wahl endet mit Rekordtief für SPD: „Nicht mehr das, was sie mal war“: Experte offenbart Ursachen](#)）では、SPDの全体として敗北の深刻さを衝きつつ、「以前のSPDの支持者たちは、いったん、投票に行かず棄権することを選んだが、いまはAfDに入れている」という声を紹介している。要するにAfDは、かつてSPDの牙城であった所で強い、ということであり、「AfDは、新しい労働者の党だ」という指摘が引用されている。もちろん、選挙結果を見れば、緑の党の凋落もしくは没落もまた、今年2月の連邦議会選挙同様、誰の目にも明らかである。つまりは、労働運動を基盤としていたはずのSPDと、市民運動の展開を命綱としていたはずの緑の党は、いずれもその運動の――あるいは、おそらくは表裏一体をなすであろう、その政党としての活動の――根本的な反省もしくは見直しを迫られているということである。ドイツの、ヨーロッパの、世界の右傾化は、当然のこととして、労働運動と市民運動の弱体化と軌を一にするものであるには違いない。ノルトライン・ヴェストファーレン州の地方選は、このことを改めてわたしたちに突きつけるものでもある――しかしもちろん、すべては運動の主体たる存在に懸かっているのであるから、あれこれと思弁を弄したところで解決に向かうわけではないのではあるが。

「左派のライン地方と右派のルール地方か？」という問いは、双方の地域におけるAfDの選挙結果と本質的に関わるものである。ライン地方とルール地方における、それぞれの代表的な諸都市の開票結果は、以下の通りである。

【ライン地方】

ケルン（人口102万人）

緑の党 25.0%（28.5） SPD 19.9%（21.6） CDU 19.9%（21.5） 左翼党 10.8（6.5）
FDP 3.9%（6.5） AfD 9.1%（4.4） BSW 1.9%

以下、（ ）内は前回2020年の結果。

緑の党とSPDは漸減ではあるものの、これら中道左派政党と、左翼党とBSWとで57.6%となっており、CDUとAfDを合わせた保守＋極右の29%の約2倍となっている。西欧型大都市における、リベラル＋左翼勢力が多数派を形成する小党分立状況であり、ほぼベルリンやハンブルクと共通する傾向を示している。AfDは、たしかに倍増であるが辛うじて一桁にとどまり、一方、左翼党は今回は二桁に乗せて第四党となっており、要するに、ここでも、極右と、それに対抗する左翼との双方が伸張する、という図式が見られると言っている。現在の状況では、反軍拡・反極右を掲げる政党に対しては、左翼党に票は向かうが

BSW には向かわない、ということでもあり、今年 2 月の連邦議会選挙で、0.02% の差で 5% 足切り条項を突破できず、BSW が議席を獲得できなかったことの影響は、この選挙においても表れているのではないと思われる。

市長の座を巡る決選投票は、緑の党と SPD の候補者の間で 9 月 28 日に行なわれるが、この二つの政党の候補者が市長の地位を争うということ自体（つまりは、この二党が第一党と第二党を占めているということである）、ノルトライン・ヴェストファーレン州においても、きわめて稀なことである。

デュッセルドルフ（人口 61 万 9000 人）

CDU 33.5% (33.4) 緑の党 21.9% (24.0) SPD 14.9% (17.9) AfD 10.6% (3.6)
左翼党 6.7% (4.1) FDP 4.9% (9.2) BSW 1.6% その他 6.2%

ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都であるデュッセルドルフは、リベラルな空気がそれなりにあることでも知られるが、しかし、今回の選挙結果を見ると、中道左派（SPD と緑の党）はいずれも後退しており、左翼党は増えているものの、AfD は 3 倍化して二桁を確保しており、その意味では、ほぼこの州の一般的な傾向を体現していると言えることができる。

市長の決戦投票は、CDU と緑の党の候補者の間で行なわれる。

ボン（人口 32 万 3000 人）

CDU 32.0% (25.7) 緑の党 26.3% (27.9) SPD 11.8% (15.6) 左翼党 8.7% (6.2)
AfD 6.0% (3.2) FDP 2.9% (5.2) BSW 1.1%

ライン地方では、nd 紙の論評にあるように、AfD は総じてなお少数であるが、かつての西独の首都であるボンも、幸いにもその傾向を示している（とはいえ、2 倍になっているという事実も無視することは許されないが）。左翼党と BSW は、後者が分裂していなければ、あるいは 10% を越えていたかも知れず、そうなれば、この町では SPD と拮抗した勢力となっていたことであろう。

市長の決戦投票は、CDU と緑の党の候補者の間で行なわれる。

ミュンスター（人口 30 万 8000 人）

CDU 31.3% (32.7) 緑の党 31.6% (30.3) SPD 14.1% (17.6) 左翼党 8.4% (4.9)
AfD 4.5% (2.2) FDP 2.9% (4.6) BSW の記載なし その他 7.2%

この町も、中道左派 2 党（緑の党と SPD）と左翼党で 54.1% となり、数字の上では多数派を形成している。しかも、AfD はなおきわめて少数である。

市長選の結果は、緑の党の候補が 41.30%、CDU の候補が 37.27% で、この両者で決戦投票が行なわれる。

アーヘン（人口 26 万 3000 人）

CDU 32.8% (24.8) 緑の党 27.8% (34.0) SPD 13.4% (18.3) 左翼党 7.7% (4.6)

AfD 7.7% (3.4) FDP 2.7% (5.0) BSW 1.7% その他 6.2%

CDU の勝利と緑の党と SPD の敗北という結果であるが、AfD は少数派であるとはいえ、得票率は前回の 2 倍以上となっている。左翼党は、ライン地方の他の都市同様、数%の増加を示すものの、BSW は、他の都市と同様に、まだ確乎とした存在感を獲得してはいない。

市長選の決戦投票は、CDU と緑の党の候補者の間で行なわれる。

【ルール地方】

ドルトムント (人口 60 万 3000 人)

SPD 24.9% (30.0) CDU 22.1% (22.5) AfD 16.6% (5.5) 緑の党 16.5% (24.8) 左翼党 8.0% (5.6) FDP 2.1% (3.5) BSW 2.0%

ライン地方の諸都市における AfD は、前回に比べて伸びているとはいえ、ほとんどは一桁台の得票率にとどまっているのに対して、ルール地方では情勢が一変し、15%から 30%の間にまで達しており、ドルトムントでも緑の党を抜いて第三党の位置を確保している。AfD は三倍化し、緑の党は 30%減である。

市長の決選投票は、SPD と CDU の候補者の間で行なわれる。

エッセン (人口 57 万 5000 人)

CDU 30.22% (34.45) SPD 22.65% (24.26) AfD 16.91% (7.46) 緑の党 12.34% (18.62) 左翼党 5.8% (3.9) BSW 1,5%

エッセンは、かつて「死の商人」の代名詞であったクルップ一族の本拠地であり、つまりは、ナチスの軍需産業の中心をなす工業都市であった。現在も、その工業都市という性格はおそらく変わっていないであろうが、ともあれここでは、AfD は前回から支持率が 10%近い伸びを見せ、ドルトムント同様、激減した緑の党を抜いて第三党となっており、CDU と AfD の二党を合わせると過半数に近い支持率となっている。

市長の決選投票は、CDU と SPD の候補者の間で行なわれる。

デュイスブルク (人口 50 万 2000 人)

SPD 32.6% (30.8) AfD 21.2% (9.3) CDU 17.4% (21.5) 緑の党 9.1% (17.7) 左翼党 6.0% (5.5) BSW 2.1%

ここでは AfD は CDU を抜いて第二党になっており、緑の党は前回からほぼ半減である。おそらくほとんど例外的であろうと思われるが、ここでは SPD は前回からはプラスの数字を示している。

しかし、nd 紙の論評「デュイスブルク——かつての SPD の心臓部」([Duisburg – Die ehemalige Herzkammer der SPD | nd-aktuell.de](https://www.nd-aktuell.de/artikel/duisburg-die-ehemalige-herzkammer-der-spd))によれば、デュイスブルク - ノルデン地区は、現在は AfD の牙城へと変貌を遂げており、SPD は、その限りにおいて見る影もない状況に

なっているとのことである。さまざまな国からの移民・難民の問題は、じっさいにそうした人びとを受け入れ、ともに生活している市民たちにおいては、紙の上ではなく現実の日常生活上のものにほかならず、それを含めて、ともかく既成政党への、さらには連邦段階における政策への抜き差しならぬ不満の念は、SPD や CDU からの離反を加速させる原因となっており、「AfD ならば、何かを根本的に変えてくれるだろう」という意識が——その願望の根拠を問うことなく、であろうが——投票行動に作用することになる（これはおそらくインターナショナルな現象であろう）。

市長の決戦投票は、SPD と AfD の候補者の間で行なわれるが、AfD に対抗するため、つまりは、AfD に市長の座を渡さないために、SPD と CDU は、決戦投票では相互に協力することで合意しており、したがって、デュイスブルク、ゲルゼンキルヒェン、ハーゲンでは、その合意が生きることになるであろう。

ボーフム（人口 35 万 9000 人）

SPD 28.1% (33.7) CDU 20.0% (20.8) AfD 14.9% (5.6) 緑の党 14.4% (22.2)
左翼党 9.5% (6.1) FDP 1.9% (3.3) BSW 1.7%

ボーフムと、次に掲げるヴッパータールとは、町の人口の規模にせよ、各政党の得票率にせよ、互いにきわめてよく似かよっている。左翼党がほぼ 10% に達しようとしている状況を見ると、ノルトライン・ヴェストファーレン州において、左翼党が、たんに大都市のみならず、少なくともいまの時点においては、相対的に広く受け入れられ始めているであろうことを感知することができる。他方、ここでもやはり AfD は三倍化である。

決選投票は SPD と CDU の候補者の間で行なわれる。

ヴッパータール（人口 35 万 8000 人）

SPD 28.8% (28.9) CDU 22.2% (24.2) AfD 17.1% (6.1) 緑の党 11.4%
(19.6) 左翼党 8.4% (6.6) FDP 4.2 (7.2) BSW 2.5%

ここでも、左翼党の分裂がなければ、緑の党と拮抗した得票率だったかも知れないと思わせる数字であるが、緑の党自体は、前回からは 4 割減であるから、惨敗の一語に尽きる状況である。

決選投票は SPD と CDU の候補者の間で行なわれる。

ゲルゼンキルヒェン（人口 26 万 8000 人）

SPD 30.4% (35.1) AfD 29.9% (12.9) CDU 19.2% (23.2) 緑の党 4.6% (12.2)
左翼党 4.3% (3.5) BSW 1.6% その他 10.1%

ゲルゼンキルヒェンの状況は、ほとんど東部ドイツの州の選挙結果を想起させるものである。AfD は CDU に 10% 近い差をつけ、SPD と第一党を巡ってデッドヒートを演じている観がある（去年 9 月のドイツ東部ブランデンブルク州の州議会選挙は、まさしくそれと同一の傾向を示していた）。それにしても、緑の党は前回のほぼ 3 分の 1 強まで落ち込んで惨敗であり、ここでは完全に勢いを失っているかに見える。

市長の決戦投票は、SPD と AfD の候補者の間で行なわれる。

ハーゲン（人口 19 万人）

CDU 26.4% (27.5) AfD 22.4% (9.3) SPD 19.9% (25.5) 緑の党 7.4% (13.3)
左翼党 3.9% (2.9) BSW 3.1% FDP 3.0% (4.6)

AfD が SPD を抜いて第二党となっており、SPD と緑の党、とくに後者の現時点における凋落は深刻である。左翼党と BSW は双方とも 3% 台で、ここに例として挙げられた他の都市に比べ、左翼党はなお少数者であるが、CDU と AfD が合わせて 49% に近いという、きわめて保守的な風土のなかでは、それもやむを得ないのかも知れない。

市長の決戦投票は、CDU と AfD という、保守・極右陣営の内部における候補者の間で行なわれる。

グレゴール・ギジは、左翼党がハンプルクやノルトライン・ヴェストファーレン州のような「西側」を向き過ぎ、東部ドイツの人びとをないがしろにした観があることを自己批判的に述べているのであるが（注 1）、しかし、現在は 12 万名まで伸びた党员数（注 2）のかなりの部分は、その西部ドイツの若い人びとである。じっさい、州単位では、党员数のトップはノルトライン・ヴェストファーレン州の 22,315 名であり、続いてベルリン市州の 16,500 名、ザクセン州の 11,000 名と続く（[In einem Jahr verdoppelt: Linkspartei meldet neuen Mitgliederrekord](#) ターゲス・シュピーゲル 2025 年 9 月 15 日）。もちろん、1800 万人の人口のノルトライン・ヴェストファーレン州であるから、その 5 分の 1 の 370 万人のベルリンとでは比較にならぬのではあるが、それにしても、ノルトライン・ヴェストファーレン州の各地（大中都市）の地方選の結果を見ると、左翼党は「旧東ドイツ（東部ドイツ）のローカルな政党」から、少なくともいまのところ、「ドイツの全国区の政党」へと、ささやかながら変化を遂げつつあるかのように見えないこともない。とくに、さまざまな都市で 10% 前後の得票率を上げている状況を見ると、その感を強くすることは事実である。

反軍拡・反極右こそは、現在の最も重要な課題である。左翼党が連邦議会選挙では避けて通った難民・移民問題も、もとよりその解決は至難の業である。いずれにしても、社会の厳しい問題に立ち向かう意志を持つ若い人びとが、左翼党であれ、BSW であれ、党员となって活動し、あるいは、緑の党の政策に批判的であるがゆえに、その緑の党に入党して党を下から変えようとする状況こそは、「市民的社会〔Zivilgesellschaft〕」を創り上げていく上での条件をなすものにほかならない。

（注 1）拙訳「グレゴール・ギジ・インタビュー」、「市民科学通信」、2024 年 10 月号、18 ページ。

（注 2）[Die Linke hat sich verdoppelt: 120.000 Mitglieder](#)、dpa、2025 年 9 月 20 日、参照。この記事によれば、左翼党の党员は、2023 年の年末には 50,800 名であったから、現在は 2 倍以上になっていることになる。緑の党は 17 万名、AfD は 7 万名で、ともに党员数は増加しており、BSW もやはり党员の拡大に取り組んでおり、現在は 4,500 名にまで到達している。2025 年 2 月の連邦議会選挙を、BSW は 1200 名ほどの党员で戦わざるを得なかったのであるが、来年 9 月のベルリン市州議会選挙では、少なくとも 5% 阻止条項を突破して議席を獲得することが至上命令であり、ベルリンでの党员の拡大は本質的な意味を持つことになる。

（てるい ひでき）

資本制社会の日常意識（2）

小林一穂

1. 日常意識のとらえ方（第 63 号）
2. 商品世界の日常意識（第 63 号）
3. 資本の生産過程と日常意識（本号）
4. 資本の流通過程と日常意識（本号）
5. 資本の諸姿容と日常意識（以下次号）
6. 資本制社会を超える知と意識

3. 資本の生産過程と日常意識

資本の運動

商品世界での商品交換は、商品Wが貨幣Gと交換され、次にGがWと交換される、という単純な商品流通の $W-G-W$ が無数に繰り返される。商品交換では等価交換が原則だから、交換の連鎖がどれほど続いたとしても価値が増加することはありません。売り手が買い手をだましてより多くの価値を手に入れたとしても、買い手は損をしているわけで、全体として価値の増減はない。それに対して、資本が運動する資本世界では、資本の運動過程は、GがWと交換され、次にWがGと交換される、という過程が $G-W-G'$ の過程として展開される。最初の貨幣と交換後の貨幣とは、質的には異ならないが量的に拡大している。商品交換の連鎖のなかで資本が自己増殖するから、全体として価値量は増える。だが、等価交換なのに価値が増えるとは、その価値はどこから生まれるのか。

流通過程ではないとすれば、価値増殖が生産過程で生じているほかはない。マルクスは「ここがロドス島だ、ここで跳べ」という。資本の生産過程では、資本家がつまるところ生産手段すなわち労働手段および原材料と、賃労働者がつまるところ労働力が消費されて、新たな生産物が産出される。この労働力こそが価値増殖の源泉だ。労働力の価値は、賃労働者が1日働く労働力の再生産に必要な生活手段を生み出す労働時間すなわち必要労働時間の価値で、これが賃金として資本家から賃労働者へ支払われる。労働力と賃金との交換は等価交換になっている。だが、労働力は、生産部面で消費されると新たな価値を形成する。労働力は自らが必要とする生活手段の価値量にとどまらず、さらに余剰な価値を創造する。それが剰余価値であり、剰余労働時間で生み出される。

労働力の売買という等価交換によって資本制的生産が営まれるが、そこで剰余労働によって生み出された剰余価値は、対価を支払うことなく資本家が手に入れることができる。このことは、剰余労働が不払労働になってしまうということを意味している。つまり、資本制的生産では、等価交換の原則にしたがいつつ剰余価値を搾取する、という機構が作動している。資本の生産と流通は商品交換があるからこそなりたっている。資本が商品世界とは別のところで運動しているのではない。商品世界と資本世界とは別々の世界だとか、あるいは異なる社会領域だということではない。労働力商品の売買は等価交換なのであって、双方の当事者が正当だと認めている。その結果として剰余価値が無償で資本家のものになるとしても、それは略奪や詐欺ではない。

利潤の追求

拡大再生産を不断に推し進める資本制的生産は、人々が日々の日常で働かせている日常知では、

資本家が利潤を追求する行動とみなされる。利潤を増やすために、資本家は労働時間を可能な限り延長しようとする。可能な限り労働日を延長すること、それが資本家の使命となっている。しかし、1日は24時間しかないので、時間の延長には限界がある。そこでもう一つの方法として、自分だけが生産性を上げて自分だけが利益を得ようとする。自分だけが他の資本家に先駆けて生産性を上げることができれば、自分が生産する商品が、その商品の一般的な社会的に通用している市場価格よりも安い価格で販売できて、商品市場での価格競争を勝ち抜くことができる。あるいは、自分の商品を他の生産性が低い資本家が生産した商品と同一の市場価格で売れば、自分の商品の価値が小さい分だけ余計に利益が手にはいる。

眼前の事実のなかで目に見えない機構が作動していると考えれば、労働時間の延長によって得られるのは絶対的剰余価値で、これは、必要労働時間以上の、剰余労働を延長することで生み出される。資本はつねに絶対的剰余価値の獲得を目指している。「残業社会」はその典型だ。だが、賃労働者の抵抗や1日の労働時間の限界などで制限されるので、資本は生産力を上げて剰余価値が増えるようにする。これは、必要労働時間を短縮させて、その分だけ剰余労働時間が延長されて相対的剰余価値が増加するものだ。相対的剰余価値を得るために、つねに技術革新をおこない生産性を高めようとして、新たな機械類や管理システムを導入する。この生産方法の革新は、協業、マニファクチュア、機械制大工業と、段階的に進んできた。

生産方法の革新

協業によって結合された生産力は、個々人の労働力がもつ生産力のたんなる合算ではなく、協業という形態そのものがもつ生産力として発揮される。他方で、賃労働者が共同的な労働に従事するようになると、全体を監督し調整する機能が必要となる。それは、オーケストラが個々の演奏家をまとめる指揮者を必要とするのと同じだ。このことが取り違えられて、協業の生産力が資本の生産力とみなされ、全体の指揮監督という機能が資本の指揮権の機能とみなされる。職階制は、この資本の指揮監督を細分化したものだ。日常知としては、資本家は賃労働者を雇い入れ、自分の生産現場で働かせて、労賃を支払うのだから、資本家が賃労働者を統制するのは当然のことだ。そこで、生産過程にとって必要な機能を資本家が仕事として担うのであって、それに対応する報酬を資本家が得るのも当然だとされる。

協業からマニファクチュアへと進展すると、労働者の全員が、結合された一つの全体労働者として構成される。それに対応して生産過程での労働は個々の作業ごとに分割され、賃労働者はそれぞれの個別作業だけに従事させられる。賃労働者は個別化され、特殊化された部分労働者でしかない。他方で、資本家は結合された全体労働者を指揮監督するので、資本の指揮権がさらに強められる。作業の全体は統括している資本家にしかわからない。そこから、自立的な直接的生産者が発揮する知的活動は、マニファクチュアに従事する賃労働者では失われ、資本のものとなる。日常知では取り違えがいつそう深まり、資本家が生産を主導しているのであって、労働者はそれに追従しているにすぎないとされる。

マニファクチュアでの部分労働者への作業の個別化は労働者が従事する作業によって分割されていたが、機械による生産では機械そのものの技術的な必要によって分割される。そうになると、労働者の都合ではなく機械の都合によって工場内分業が進む。さらに、機械体系が自動化されると、機械体系が労働者に対して外的な強制として立ち現れる。機械体系そのものの編成にしたがって生産が営まれ、それに労働者が適合させられる。日常知では、生産の主体は機械であり、人間は機械の部品にすぎない。高まった生産力は機械の生産力であって、人間の生産力ではない。このように取り違えが深化する。自動装置が賃労働者の身体的および知的自由を完全に奪うので、資本家による支配権力は最大限に達する。

労働力と労働の取り違えによる搾取の隠蔽

資本制的生産では、賃労働者は、自らの労働力を資本家に販売して生産活動に従事し、労働力の対価として賃金を受け取る。資本家は、必要労働分は賃金として支払うものの、剰余労働による剰余価値は無償で手に入れている。これはもちろん、学知によってとらえられる目に見えない機構であって、日常知にとって眼前の事実としてあるのは、すなわち目に見えているのは、労働力が売買されるのではなく、労働が売買されるということで、この労働の対価として労賃が支払われるとみなされる。

ここでは、労働力と労働との取り違えが生じている。労働が等価交換という商品交換の原則にしたがって売買されていて、そこには不正も略奪もなく、対等で自由意思による交換がおこなわれているとみなされる。資本家からすれば、労働の対価を正當に支払っているはずで、それが労賃だとみなしている。この資本家的な日常意識は賃労働者にも浸透している。彼は、自分が1労働日を働いた対価として、あるいは自分が労働した結果である生産物の対価として労賃を受け取っていると意識しているのであって、不払労働分が支払われていない不当な労賃になっているとは思っていない。剰余労働の存在とその搾取は、資本家と同様に賃労働者にとっても不可視なものとなっている。労働力ではなく労働が売買されているという取り違え、労働は商品が価値をもっているのと同じく価値をもっているという取り違え、が生じていて、資本家であれ賃労働者であれ、剰余価値の搾取という事態は、日常意識では気づかれぬままになっている。このように労賃という形態は不払労働の搾取を隠蔽している。

労賃による隠蔽という事態は、さらに、出来高賃金という方法で高次化される。労賃の支払いを労働時間ではかるのではなく、労働の結果である生産物量で決める出来高賃金になると、労働時間によってではなく生産物を基準にして労賃が決まる。生産物の質の良し悪し、あるいは時間当たりの生産量の多寡によって労賃が決まるかのようにみなされるので、賃労働者は、資本家の労務管理がなくても一定の水準で働かざるをえない。賃労働者は自発的に、より過酷で長時間の労働に従事することになり、資本家は労せずして利潤の拡大をはかることができる。昔の風呂敷残業や最近のモバイル残業はその例だ。

資本世界の日常意識（1）

日常知からすれば、賃労働者の労働と資本家が支払う労賃との交換は、等価交換の原則にのっとっているかのように見えるので、そこでは当事者同士の自由で平等な交換がおこなわれているとみなされる。商品一般の売買と同様に、正當な等価交換として賃労働者の労働に対して資本家が労賃を支払うのだから、就業それ自体は強制されているのではなく、当人の意思によるのであって、賃労働者としては、労賃を受け取る以上は労働に従事するのは当然だとされる。また、資本家が雇い主として従業員を働かせて、生産部面で自分が指揮し監督するのは当然のことだとなる。さらに、生産手段も資本家のものだから、生産活動によって生み出される生産物は資本家のものであり、生産物を販売することで得られる利益は資本家のものとされる。資本家の指揮監督は資本家の仕事とみなされる。資本家と賃労働者は同じように働き、同じように報酬を得る。資本家と賃労働者とが同じ立場だとされる。

賃労働者は、労働条件や勤務内容、また職場の人間関係などに問題を感じて、異議申し立てをすることがあっても、それは個別の問題とされていて、労働と労賃の交換、労賃による生活の維持という日常生活そのものが疑問とされることはない。新規学卒者が就職することを「社会に入る」と称するように、社会の構成員として生きることは賃労働者として生きることであり、人生とはそういうものだとして当然視されている。また、労賃が高ければ高いほど生活手段を多く手に入られるので、出来高賃金によって自らの生産量に応じて労賃が支払われることや、資本の拡大再生産にともなって労賃が上昇することを歓迎する。雇用されている企業が順調なのは、雇用の確保や労賃の上昇のために好ましいこととなる。

しかし、学知からみれば、賃労働者は自らの労働力しかもっていないので、生活手段を得るた

めには、自分の労働力を売って生活手段を買う賃金を手に入れるしかない。働かざるをえないのだから、賃労働者の自由意思だというのは、仮象、すなわちまったくの虚偽である幻想ではないが、日常生活のなかで通用し妥当しているという意味での仮象でしかない。資本家による支配と賃労働者の従属は、資本制的生産のもとで必然的に生じている。そもそも労働力と賃金の交換では、貨幣をもつ資本家のほうが優位性をもっている。それに加えて、賃労働者は貨幣を手に入れるには労働力を販売するしかない。また生産部面では、労働力を購入した資本家が、その労働力を自らが所有する労働力として扱うので、賃労働者は資本家の意向にしたがわざるをえない。職場での「パワハラ」や本人の意思に反した配置転換などは、それを示している。

賃労働者は、生産部面では厳しい労働条件のもとで疎外された労働に従事している。労働力の販売、生産部面での労働、産出された生産物の販売、賃労働者によるその購入、そして再び労働力の販売、という再生産過程が、いわば永続的に繰り返される。これは、つねに一方での資本家階級と他方での労働者階級とが再生産されているということだ。資本家の支配と賃労働者の従属という階級関係、すなわち支配と従属という社会関係が再生産されている。しかし、こうしたことは不可視の機構として作動していて、当事者の目には見えない。

4. 資本の流通過程と日常意識

資本が循環する再生産過程

商品世界としては単純な商品流通であるものが、資本世界としては資本価値が自ら運動する過程すなわち資本の流通過程としてとらえられる。その資本循環は、貨幣G－商品W…生産P…商品W'－貨幣G'という定式で表される。この定式のGで始まりG'で終わる貨幣資本としての循環過程では、貨幣形態の資本価値が、過程を経た結果、増殖された貨幣形態となる。この循環過程では、前提である出発点の貨幣形態と過程を媒介した結果である復帰点の貨幣形態とが同一で、量的には増加しているが質的には変化していない。

この循環過程の特徴は、一つには、過程の結果が過程の前提と同一なので、結果が前提となって過程が繰り返されるということだ。資本の不断の過程は、前提と結果が同一なので再び繰り返されるという再生産過程として持続している。もう一つは、前提と結果が同一なので途中の経過が目に見えなくなっているということだ。Gで始まりG'で終わる過程の途中経過は、結果であるG'では消失してしまっているので、GからG'へと直接に変化しているとみなされる。

日常知では、資本価値が流通過程で増加するように見える。学知の分析で明らかな、労働力商品の売買が資本の循環過程に包括されていて、その労働力が生産部面で消費されることで価値増殖がもたらされる、ということは目に見えない。むしろ逆に、投下した貨幣よりも生産物を販売して手に入れた貨幣が増加しているので、流通過程でこそ価値が増殖するとみなされる。資本がそれ自体として価値を生み出すとする日常意識は、資本が流通部面を運動することによって価値が増殖するという資本の運動の結果を、眼前の事実としてそのまま受け取っている。生産過程が抜け落ちているので、生産部面での剰余労働の搾取という資本の本性が隠蔽されている。

資本の回転と諸形態の区別

資本の生産過程では生産手段と労働力が合体するが、この両者は不変資本と可変資本という二つの形態に区別される。不変資本である生産手段は、労働手段と原材料からなり、生産過程の経過のなかでその価値が生産物へと移転するが、その価値量は変わらない。それに対して、可変資本である労働力は、それが生産過程のなかで消費されることで、新たな価値を形成、創造する。資本の価値増殖は可変資本である労働力が新たな剰余価値を生み出すことでもたらされる。

ところが、生産過程に加えて流通過程を包含して考察すると、こうした形態的区別とは異なった固定資本と流動資本という区別がとらえられる。生産手段のうちの労働手段は、資本循環の1

回転でその価値がすべて生産物に移るのではなく、価値の一部分だけが移っていき、残りはもとの労働手段に固定している。資本循環が何回転かすると労働手段全体の価値が生産物に移転する。それに対して、原材料は1回転でその全価値が流動して生産物に移転する。つまり、不変資本は、繰り返される複数の回転で部分的に価値移転する固定資本と、1回転で全価値が移転する流動資本とに区別される。他方で、可変資本である労働力は、資本循環の1回転でその価値のすべてが消費され、新たな価値が形成、創造される。つまり可変資本は流動資本だ。そこで、不変資本である労働手段と原材料、可変資本である労働力、という区別と、固定資本である労働手段、流動資本である原材料と労働力、という二つの区別に分けられる。

資本の総過程と再生産表式

社会総体の生産をみると、社会的総資本は2つの部門に分けられる。第Ⅰ部門は生産手段を、第Ⅱ部門は消費手段を生産する。そして、それぞれの部門の内部と二大部門の間とで、生産物が転換される。単純再生産の場合には、第Ⅰ部門から第Ⅱ部門へと転換された生産手段の価値Ⅱcと、第Ⅱ部門から第Ⅰ部門へと転換された消費手段の価値にあたる労働力価値Ⅰvと剰余価値Ⅰmは同一となる。つまり、ⅡcとⅠ(v+m)とが等しくなる。そして、この両構成部分の交換を通じてそれらの現物形態が相互に交換されることになる。

このことからアダム・スミスの取り違えが生じた。第Ⅰ部門の生産物のうち、生産手段として再び第Ⅰ部門の生産過程に投入される部分は、資本の不変資本部分を消去してしまうスミスの「魔法」によって論理から脱落してしまい、第Ⅰ部門のv+mの部分が第Ⅱ部門のcの部分と転換されて販売され、また第Ⅱ部門のv+mも消費手段として販売されるということで、社会的総資本の生産物がすべてv+mとして商品交換されるとみなされる。そこで、vが労賃という収入形態を、mが利潤と地代という収入形態をとるので、これら労賃、利潤、地代という収入が商品価値の3つの本源的な源泉だということになる。生産物はv+mすなわち労働力価値と剰余価値からなるので、生産物は労働力商品の対価として賃労働者が受け取る労賃、剰余価値の現象形態である利潤および地代とから成り立つことになる。労賃は賃労働者の収入として生活手段の購入にあてられ、利潤は資本家の、地代は地主の収入となる。こうして、生産物の価値は労賃、利潤、地代という3つの収入から構成される、というスミスの定式ができあがる。

このアダム・スミスの「ばかばかしいドグマ」は、その後のイデオロギー知を担う経済学者たちによっていっそう通俗的な形態で維持された。賃労働者は自らの労働力を販売して得た貨幣で生活手段を購入して自らの労働力を維持し再び販売するので、彼の労働力はそれ自体として彼の資本であって、それが彼の収入の源泉となっている、といった誤りは、スミスによる労働によって労賃が得られるという主張を俗流化したものだ。賃労働者が自らの労働力を商品としてもっていることが、彼が資本家であることを証明している、というような言説は、資本制的生産様式のもとでは、賃労働者階級は自らの労働力を資本家階級に販売することでしか生活手段を得ることができないという階級関係を、賃労働者もまた資本家だという言説で隠蔽するイデオロギーにすぎない。

資本世界の日常意識（2）

固定資本と流動資本が区別されるのは価値の移転の仕方が異なるからだが、その違いは素材である使用価値のあり方による。たとえば、労働手段である紡績機は綿花から糸を紡ぐという生産で何度も使用されるが、原材料の綿花は1回転ですべてが加工されて糸へと変化してしまう。マルクス以前の経済学者たちは、資本を構成する諸物の使用価値を的確にとらえず混乱してきた。それは経済的な形態と素材との混同だ。機械のようにそれ自体は資本ではないものが、機械という素材によって固定資本とされるので、そのものとして本来的に資本だとされる。商品世界での物神崇拜では、金の素材そのものが社会的関係にかかわりなく価値をもつとみなしてしまう幻想

が生じるのと同様に、生産手段が社会的諸関係とはかかわりなく、素材そのものとして資本という特殊歴史的な経済的形態をもつとする幻想が生じる。機械という素材そのものの性質から機械が資本として機能する、というようにみなしてしまう混乱が生じた。

さらに、固定資本と流動資本の区別と、不変資本と可変資本の区別とを混同したために、資本制的生産での剰余価値の源泉をとらえることができなくなった。価値が移転するあるいは価値が運動するのは、生産過程と流通過程との両方で展開しているが、剰余価値が創造されるのは生産過程だけだ。ところが、マルクス以前の経済学は、流通部面での商品資本および貨幣資本と、生産資本の流動的部分である原材料と労働力とを混同して流動資本というカテゴリーに入れたので、剰余価値が流通過程で生み出されると誤ってしまい、可変資本すなわち労働力こそが剰余価値の源泉だということを見失った。

マルクスは、古典派経済学を大成したアダム・スミスを、俗流経済学とは一線を画して位置づけているものの、厳しく批判している。スミスは生産過程での価値移転や価値形成と資本循環における価値の運動とを混同して、流動資本を規定するにあたって商人資本を例としてあげて、流通過程で価値が形成され、剰余価値が生み出される、という誤りに陥っている。だが商人資本は流通過程での資本であって流動資本ではない。こうしたスミスの混乱を、マルクスは「普通の資本家の物の見方」からする「粗雑で経験的な観念」だと批判する。資本家の日常意識では、目に見えるのは流通過程での $G-W-G'$ という形態での資本価値の運動なので、流通過程での生産物の販売によって剰余価値を生み出だされるとみなすことになる。労働力の流動資本という形態から、価値の形成と創造を見失ってしまう、という錯誤をスミスも犯している。

スミス以降の経済学では、不変資本と可変資本の区別ではなく、固定資本と流動資本との区別を唯一の区別だとし、混迷が深まっている。もはや、不変資本と可変資本という規定そのものが消え失せてしまい、生産手段に投下される固定資本と労賃に投下される流動資本という区別だけになる。労働力が流動資本としてしかとらえられないので、資本価値が流通部面へ、徐々に移転されるか一度に移転されるかという問題だけになる。そうすると、剰余価値の創出は全く問題にならず、その源泉が完全に隠蔽される。ここから、イデオロギー的な神秘化あるいは幻想が生じる。俗流経済学では、剰余価値がどこでどのように創造されるのかは、資本制的生産の機構からは全く離れて、流通過程の問題だという幻想がふりまかれる。

ここに資本世界の日常意識の特徴が示されている。日常知からすれば、資本の運動が $G-W-G'$ としてしか見えないので、流通部面で生産物や労働が販売されることで利益が得られる、とみなされる。だが、そのような仮象は、生産部面での剰余価値の創造が目に見えないために生じている。生産物が日常的な売買によって貨幣と交換され、その貨幣額が当初に投下した貨幣額よりも増加しているのだから、この商品交換すなわち流通過程で価値が増加しているとみなされる。資本家の日常意識では利潤は流通によって生まれると考える。それは賃労働者の日常意識でも同様で、労働の売買によって労賃がもたらされるので、流通によって収入が得られると考える。賃労働者にも資本世界の日常意識が浸透している。

(こばやし かずほ)

激しい雨が降る ―K さんへ―

中村共一

K さん

やっと秋の気配を感じるころになりましたね。

この季節になると、近くの小川（高野川）の土手ぞいに彼岸花が咲きほこります。一見、レッドカーペットのようで艶やかなのですが、日本人だけに、「彼岸」の花としての意味づけが心をとらえ、久しかった知人の顔が思い出されてきます。齢を重ねると、知人との死別もふえ、人生における過去が一段と重く感じられます。多くの人々とのつながり——その理性、行動、感情のありさま——が、オムニバス映画をみるように、思い出されてくるのです。

しかし、人間は薄情ですね。思い出されてくる人々は、心痛く苦いかかわりをもった人たちか、自分の生き方を形づくってくれた人たちです。多くの人々との過去は、意識から消えてしまいます。しかし、直接かかわったことのない死者でも、現在の自分と——直接であれ間接であれ——繋がっている人びとは、なお、僕のなかに生きています。大学教員の職にあったせいか、大学・大学院の指導教員であった篠原三郎先生をはじめ、内外の多くの社会学者、哲学・思想家、文学・芸術家などがいまでも僕の心に住みついています。なかでも、カント、マルクス、ニーチェ、ヴェバー、柄谷行人（1941-）といった人たちは、僕の思想を鍛えてくれた人たちです。同時代に生きる友人・知人たちとの交流ばかりでなく、こうした過去の人々とのつながりのなかで、現在の「生き方」があるのだとつくづく思います。

K さん

ちょっと理屈っぽくて恐縮ですが、人間の「生」は、もともと過去・現在・未来という「時」のなかにあり、誰もがその「時間の流れ」を生きています。しかし、よくよく考えてみると、この「流れ」は、線引きされた時間ではなく、「私の現在」という一瞬に、時間的な「連続」をもっていることに気づきます。その瞬間に「過去の私」・「現在の私」・「未来の私」が同時存在しているともいえます。また「私」というアイデンティティにつながれているとはいえ、関わり合う社会諸関係の変化のなかで、「私自身」が「変化」しています。人間は、固定した不変的存在なのではなく、過去・現在・未来が折り重なって、絶えず「変身する私」としてあるのです。

では、私の過去・現在・未来を決定づけるものは何でしょう。「現在」と「未来」が「経験された過去」を前提にして生まれてくるとはいえ、単純に「経験された過去」が「決め手」となるわけではありません。むしろ、意識的存在としての人間にとって本質的な点は、個人の意識的な「選択」があることによって、「継続」や「変化」を生みだされるという点が重要ではないかと思います。

とはいえ、「意識的な選択」は、ストレートに「自律的なもの」となるわけではありません。これが厄介な問題です。実のところ、私たちが置かれている歴史的諸条件において、「他律的」に意識し、選択・行動している現実があるからです。今日の歴史的諸条件といえば、「マーケット」（資本主義市場経済）であれ、「国家」であれ、本来的に自律的なシステムです。個々人の側からすれば、その与えられたシステムに他律的に順応し、意識的な「選択」を重ねているにすぎません。私たちは、日々、そのシステムに依存し「他律的な選択」を繰り返し、そのなかで過去・現在・未来を紡いでいるわけです。しかし、「マーケッ

ト」は、個人の意識や行為を、「マーケット」（資本物神）の変化に押しとどめ、個人の自律的な現在や未来を剥奪しています。この自律性の喪失は、「マーケット」がはらむ「死に至る病」であり、「自分の生」を失うことでもあります（ストレス、精神障害、暴力、自殺・他殺）。また「国家」は、自らの国家体制を「維持」しつづける自律的なシステム（国家物神）を築いています。ここでも、国内的な法的統治や対外的な暴力・戦争が優先され、個々人は「国民」として他律的に服従——自発的な形としてはナショナリズム——しています。個人の自律性にもとづく「自由と連帯」が「排除」され、国境を越えた市民的な自治、移動、人権、平和が暴力的に「抑圧」されてしまうのです。したがって、私たちが置かれている歴史的諸条件をふまえていえば、現状に留まるかぎり、「未来」は「他律的な選択」のなかにしかないといえます。

しかし、Kさん

未来は、そうした「他律的未来」ではなく、「自律的未来」もありえます。

「他律的社会」が、戦争、地球環境破壊、経済格差といった根本的な限界を抱えているからです。また、自己の回帰や永遠平和の実現は、「他律的な未来」ではありえないことだからです。ですので、過去・現在・未来を、私たちが置かれている対立的な歴史的諸条件をふまえてみれば、その「時の流れ」が「他律的な支配」にあるばかりか、「対抗的な選択肢」をも含んできます。そしてまた、この選択においてこそ、個人の生き方が社会的・歴史的な意味をもち、「歴史主体」としての「生き方」が追求されてくるのだと思います。

とすれば、個人の過去・現在・未来とのつながりは、その時々個人の生き方に応じて、根本的に変わってくるともいえます。そればかりではありません。「自律的未来」への選択は、諸個人を主体化し、新しい社会関係を創造することになります。他者とのつながりは、受動的なものから能動的なものに変わり、また定型的・制度的なものから自由で多様なつながりに変わっていかざるをえません。他律的な不自由ではなく、自律的な豊かさそのものが「社会創造的な価値」となっていくのです。

個人には、死に至るまで「過去・現在・未来」があります。退職＝「死」となる「他律依存の生」ではなく、「個人の自律的未来」が死に至るまであるならば、他者とのつながりは、たえず更新・革新しつづけることになるでしょう。個人の「過去・現在・未来」は、その生き方によってフレキシブルであり、「革命的」なものとなるのです。

Kさん

個人では歴史は作れない。そんな常識がかつてありました。しかし、個人が歴史主体になるからこそ、豊かな自由が創造されてくるのではないのでしょうか。国境を越えた永遠平和も実現しうるのではないかと思えるのです。「彼岸花」の話から、妙な展開になってしまいました。言いたかったことは、他律的な生き方においては、他者とのつながりは規格化され、つながりの自由を失う。しかし自律的な生き方にあっては、その生き方自体がたえず新たな自律的個人とのつながりをつくりだすのではないか、ということです。そしてまた、それが「社会創造的な未来」につながっていく。そういうことです。

「世界戦争」が進展するなかで、国際的な平和運動が生まれてくるものと期待していましたが、事態はそうなっていません。むしろ、国家による安全保障をもとめる他律的な動きが高まっています。しかし、それでもなお、戦争が、自律的な諸個人を圧殺することによって、かえって人間は、「戦争のない永遠平和」を求めざるをえません。自律的で自由な個人のグローバルな平和的共存こそが、戦争を無くしていく唯一の道であり、倫理だからです。そう考えると、現在の平和運動は、自律的な個人が自由で平等なつながりをつくっていくことにあるようにも思えます。

Kさん

こう考えていたとき、偶然、Webで反戦ミュージシャンのボブ・ディランと「再会」しました。そして、1960年代の曲ですが、僕の平和実践と繋がり、未来に向けて「回帰」させたいとなりました。「飛躍」した理由づけと反発されそうですが、この通信の余白を借りて、『激しい雨が降る』という曲の歌詞を紹介しておこうと思います。歌詞は歌われることに価値があり、意味を解釈するものではないとボブ・ディランは言いますが、歌詞は、新たな歴史的文脈において、それはそれで新たな価値をもつようにも思います。彼は、戦後、米ソの核戦争が危惧された「キューバ危機」の未来を批判して歌っていたのですが、残念なことに、現在の「世界戦争」にも通じる想像的批判ともなっています。深まりくる秋の夜長で、篤と味わってみてください。

A Hard Rain's A-Gonna Fall (はげしい雨が降る) – Bob Dylan (1963 年)

Oh, where have you been, my blue-eyed son?
And, where have you been, my darling young one?
I've stumbled on the side of twelve misty mountains
I've walked and I've crawled on six crooked highways
I've stepped in the middle of seven sad forests
I've been out in front of a dozen dead oceans
I've been ten thousand miles in the mouth of a graveyard
And it's a hard, and it's a hard, it's a hard, and it's a hard
And it's a hard rain's a-gonna fall

Oh, what did you see, my blue-eyed son?
And, what did you see, my darling young one?
I saw a newborn baby with wild wolves all around it
I saw a highway of diamonds with nobody on it
I saw a black branch with blood that kept drippin'
I saw a room full of men with their hammers a-bleedin'
I saw a white ladder all covered with water
I saw ten thousand talkers whose tongues were all broken
I saw guns and sharp swords in the hands of young children
And it's a hard, and it's a hard, it's a hard, it's a hard
And it's a hard rain's a-gonna fall

And what did you hear, my blue-eyed son?
And what did you hear, my darling young one?
I heard the sound of a thunder, it roared out a warnin'
I heard the roar of a wave that could drown the whole world
I heard one hundred drummers whose hands were a-blazin'
I heard ten thousand whisperin' and nobody listenin'
I heard one person starve, I heard many people laughin'
I heard the song of a poet who died in the gutter

I heard the sound of a clown who cried in the alley
And it's a hard, and it's a hard, it's a hard, it's a hard
It's a hard rain's a-gonna fall

Oh, who did you meet, my blue-eyed son?
And who did you meet, my darling young one?
I met a young child beside a dead pony
I met a white man who walked a black dog
I met a young woman whose body was burning
I met a young girl, she gave me a rainbow
I met one man who was wounded in love
I met another man who was wounded with hatred
And it's a hard, it's a hard, it's a hard, it's a hard
It's a hard rain's a-gonna fall

And, what'll you do now, my blue-eyed son?
And, what'll you do now, my darling young one?
I'm a-goin' back out 'fore the rain starts a-fallin'
I'll walk to the depths of the deepest black forest
Where the people are many and their hands are all empty
Where the pellets of poison are flooding their waters
Where the home in the valley meets the damp dirty prison
Where the executioner's face is always well-hidden
Where hunger is ugly, where souls are forgotten
Where black is the color, where none is the number
And I'll tell it and think it and speak it and breathe it

And reflect it from the mountain so all souls can see it
Then I'll stand on the ocean until I start sinkin'
But I'll know my song well before I start singin'
And it's a hard, it's a hard, it's a hard, it's a hard
It's a hard rain's a-gonna fall

〈和訳：Web「LyricList（りりっくりすと）」さんより〉

どこに行ってたんだい？ 青い目の息子よ
どこに行ってたんだい？ 私のかわいい坊や
私は12の霧深い山々の脇をよろめき歩いていた
6つの曲がりくねった高速道路をノロノロと進み
7つの物悲しい森に足を踏み入れた
1ダースの死の海と向かい合っていた
1万マイルも進んだら墓場の入り口だったんだ
そして、激しい、激しい、激しい

激しい雨が降りそうだったのさ

何を見たんだい？ 青い目の息子よ
何を見たんだい？ 私のかわいい坊や
私は野生のオオカミの群れに囲まれた赤ん坊を見た
誰もいないダイヤモンドのハイウェイを見た
血がしたたる黒い枝を見た
血糊のついたハンマーを持った男たちでいっぱいの部屋を見た
白い梯子が水に沈んでいるのを見た
舌をもつれさせた1万人のおしゃべりどもを見た
幼い子供が銃や刃物を握っているのを見た
そして、激しい、激しい、激しい
激しい雨が降りそうだったのさ

何を聞いたんだい？ 青い目の息子よ
何を聞いたんだい？ 私のかわいい坊や
私は警告を発する雷の響きを聞いた
世界を飲み込みそうな波の轟きを聞いた
両腕が燃えているドラマーの演奏を聞いた
誰も聞いていない1万の囁き声を聞いた
人が飢えているのを聞き、それを人々が笑っているのを聞いた
排水溝で死んだ詩人の歌を聴いた
裏路地でピエロが泣くのを聞いた
そして、激しい、激しい、激しい
激しい雨が降りそうだったのさ

誰と出会ったんだい？ 青い瞳の息子
誰と出会ったんだい？ 私のかわいい坊や
私は死んだポニーの傍で佇む幼い子供と出会った
うつ病になった白人と出会った
体が燃えている若い女に出会った
ある少女に出会い、彼女は虹を見せてくれた
愛に傷ついた男と出会った
憎しみに傷ついた別の男とも出会った
そして、激しい、激しい、激しい
激しい雨が降りそうだったのさ

何をするんだい？ 青い瞳の息子
何をするんだい？ 私のかわいい坊や
私は雨が降る前には、戻っていたいな
暗く生い茂る森の奥まで歩きたい
そこは何も持たない大勢の人がいる場所
そこは毒薬の水が氾濫している場所
そこは谷間の家が薄汚れた牢獄になっている場所
そこでは死刑執行人の顔は巧妙に隠されている

そこには醜い飢えがあり、忘れられた魂がある
そこには色は黒だけで、数字は存在しない
私はその事を話し、思いめぐらし、人々に告げて、一息つくのさ

それは山へこだまし、すべての魂に届く
そして、私は沈んでゆくまで海に立っていたい
私が歌い始める前から、それはいい歌だってわかるのさ
そして、激しい、激しい、激しい
激しい雨が降りそうだったのさ

(なかむら きょういち)

